慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

# 令和７年度 入学式

## 医学部１１０回生、１１１名が入学

令和7年4月1日に慶應義塾大学入学式が日吉記念館にて行われた。昨年と同様、YouTubeでの同時配信も併せて行われた。

開式の後、松浦良充常任理事から学事報告が行われ、各学部の入学者が発表された。本年度の学部および別科・日本語研修課程の入学者数は、6346名、医学部111名、看護医療学部105名、薬学部216名であり、全体としては昨年度の入学者数から50名程度減少で、医療系学部としては、医学部は1名増加、看護医療学部は5名減少、薬学部は昨年度の入学数と比較すると50名減少であった。

続いて、伊藤公平塾長により式辞が述べられた。慶應義塾大学の目的が読み上げられ、一人ひとりが自らの尊厳を保ちながら志を高める「独立自尊」の精神によって、仲間とともに社会の発展に尽くすという慶應義塾の理念が紹介された。また、自らの自由独立を維持し、それを他者にも与えていくために、福澤先生が『福翁自伝』の中で示された、自分自身の努力で自由独立を勝ち取っていく姿勢が必要だと語られた。最後に、体育会やサークル、講演会や交換留学など、大学が提供するリソースやその枠を超えた探究を通じて、さまざまな学びを貪欲に深め、自由自在な塾生活を送ってほしいというエールが送られた。

式辞に引き続き、伊藤塾長によって壇上者の紹介がなされ、その後、文学部の井上逸兵教授により教職員代表祝辞が述べられた。新入生に対してのお祝いの言葉の後、AIが台頭する現代社会において、AIには生み出せない人との関わりによって創発される知恵や知識を大学生活の中で学んでほしいと語られた。さらに、教員とも関わり合いながら、好奇心を持って大学生活を楽しんでほしいというメッセージが贈られた。

続いて、新入生代表の医学部一年の田邉光一君により入学の辞が述べられた。入学の喜びを述べた後、人工知能の発展が目覚ましい現代社会において、「実学の精神」こそが、大学での学びを通して身につけるべきものであると述べられた。この精神のもと、今後の社会をより良い方向に導き、日本だけでなく国際社会も含めた世界の先導者となることが新入生の使命であるという覚悟と決意が語られた。

その後、卒後50年記念1975年（昭和50年）116三田会寄付目録贈呈として、代表の岡田伸浩さん、小田村尚枝さん、渡瀬泰伸さんから挨拶と寄付目録の贈呈が行われた。慶應義塾への感謝が述べられた後、新入生には在学中の限られた期間、「学びに全力・遊びに全力」で心豊かな学生生活を大いに楽しんでほしいというメッセージが贈られた。

終幕に、塾歌斉唱が行われた。新入生6346名の入学を喜ぶとともに、今後の活躍に期待したい。

（5年　梅原千里、3年　永田みのり）

新入生たちをに向けて式辞を述べる伊藤塾長

雨模様ながら満開の桜のもと笑顔が溢れた　撮影：岸　剛史

## 2025年 新入生入学式に参加して

卒後50年招待塾員　長浜　秀策（54回）

4月1日午後2時慶應義塾大学新入生入学式に、卒後50年招待塾員として参加しました。午後1時久しぶりの日吉駅に到着。駅は新入生、その家族及び招待塾員でごったがえしていました。あいにくの小雨で、傘を差しながら、日吉駅前の横断歩道をわたり、日吉記念堂をめざして歩きます。再建された日吉記念堂が立派で、その前の広場では、多くの人が記念写真をとっていました。約1300人の卒後50年招待塾員は、新入生とは別に、到着した順に、次々と1階席へ案内されました。私の隣りは墨田区在住の法学部卒の方でした。

慶應ワグネルソサィエティーオーケストラや合唱団が演奏する中、約6300人の新入生が次々と1階アリーナ席や2階席へ入場、着席し、日吉記念堂も満席となりました。入学式の様子はYouTubeでみる事ができます。是非、この雰囲気を味わってください。

伊藤塾長のお祝いの挨拶に始まり、今年は医学部田邉君が新入生代表として入学の辞を述べました。56年前、学園紛争でおちつかない中、新入生代表として医学部の齊藤聖二君が入学の辞を立派に述べるのを、そばで聞いていた事を思い出しました。塾歌を大声で歌い、応援指導部の熱烈なパフォーマンスを最後に入学式を無事終了しました。

私達、招待塾員は日吉食堂棟へ案内され、塾主催の懇親会開始。学部別に場所が決められていて、医学部のテーブルには北川常任理事や金井医学部長もこられました。同級生の出席は10名（橋本君、池上君、吉井君、奈良君、村木君、高橋広君、高橋茂雄君、戸山君、竹中君、長浜）で、大学院卒後50年の50回生、森下鉄夫先生（消化器内科）もいらっしゃいました。福岡から来た高橋広君は卒業以来50年ぶりの再会で、顔も思い出せず、申し訳ありませんでした。

まだ仕事をしている者も多く、仕事の事、家族の事など近況を話しているうちに、なにか、大学時に戻ったような気がしました。3年後予定のクラス会でも、是非、同級生の皆様とお会いできるのを楽しみにしております。

左から、森下先生、金井医学部長、戸山、北川常任理事、高橋（広）、高橋（茂雄）、村木、長浜、吉井、竹中、橋本、奈良、池上

## 潮田猪一郎記念奨学金 追加寄付者へのお礼の会

このたび潮田猪一郎氏のご遺族から追加寄付を医学研究科に頂きました。

令和７年３月28日に寄付者を信濃町キャンパスへお呼びし、金井研究科長と2024年度潮田奨学生から直接お礼を述べる機会を頂戴しました。奨学生一人一人から研究内容と感謝の言葉を伝えました。ご遺族はすべての話しを熱心に聞いて下さいました。奨学生一同、身の引き締まる思いだったと思われます。

お礼の会の最後に、ご遺族から潮田猪一郎記念慶應義塾大学大学院医学研究科奨学基金が設立された経緯の説明がありました。1992年から基金が運営され、30年以上にわたって医学研究科における研究者育成に運用していることにたいしてご遺族からお礼の言葉を頂きました。むしろお礼を言うのは医学研究科であり、お言葉を頂いた大学院生・教員とも、更に気合いが入りました。

基金に対して追加の寄付をいただくことは当たり前のことではないことを奨学生全員が自覚し、寄付者への感謝とともに研究に励みます。

（医学研究科奨学委員　田中謙二　76回）

## 慶應赤倉アカデミー（KAA）20周年記念大同窓会開催

赤倉山荘運営委員会副委員長　秋葉　庸平（内94回）

2025年2月19日（水）に慶應義塾大学病院2号館11階レストラン（ザ・パーク）にて慶應赤倉アカデミー（KAA）20周年記念大同窓会が開催されました。KAAは新潟県妙高市にある赤倉山荘に医学部、看護医療学部、薬学部の学生が集い、講師の先生方をお招きしてこれまでの経験や想いを1泊2日の旅の中で語って頂く、学生が主体となって運営する企画です。

当日は武田純三先生（三四会会長）の開会のご挨拶、金井隆典先生（医学部長）の乾杯に引き続き、過去にKAAにご登壇頂きました講師の先生方や学生委員OBOGなどの多くの方々が旧交を温められました。その後深川和己先生（赤倉山荘運営委員長）と楊浩勇先生（赤倉山荘運営副委員長）の進行のもとで過去のKAAに講師としてご講演頂きました末松誠先生（慶應義塾大学名誉教授）、岡野栄之先生（再生医療リサーチセンター教授）、安井正人先生（医学部薬理学教授）、北川雄光先生（慶應義塾常任理事、医学部外科学教授）、大家基嗣先生（医学部泌尿器科学教授）、三村将先生（予防医療センター特任教授）、鈴木康裕先生（国際医療福祉大学学長）、中村雅也先生（医学部整形外科学教授）、小池智子先生（看護医療学部准教授）、松元一明先生（薬学部教授）、佐竹晃太先生（株式会社CureApp CEO）、堀口崇先生（看護医療学部教授）、福永興壱先生（医学部内科学（呼吸器）教授）、山内慶太先生（慶應義塾常任理事、看護医療学部教授）、深堀治樹先生（看護医療学部教授）、斉藤義正先生（薬学部教授）にインタビュー形式で当時の思い出やKAAに対する想いを語って頂きました。

また、学生時代に複数回KAAに参加しその後学生委員も務められた庄司晃先生や安藤崇之先生など多くの学生委員OBOGへのインタビューの中では、卒業後のキャリアの中でもKAAで得た経験が活きているというお話を聞くことができました。その中でKAAは「人生を変える1泊2日」であるというお言葉も頂き、当日参加していた多くの学生委員に対して激励のお言葉を頂くことができました。その後堺優真君（医学部5年）と大野杏花里君（医学部4年）からこれまで20年間KAAをサポートしてくださった深川和己先生と楊浩勇先生に感謝の気持ちを込めた記念品の贈呈が行われました。また、ご来賓を代表して末松誠先生、岡野栄之先生、北川雄光先生、山内慶太先生から未来のKAAに対しても力強いお言葉を頂くことができました。最後に渡辺真純先生（三四会副会長）と門川俊明先生（KAA会長）からのご挨拶で閉会となりました。

KAAは2006年に第1回が開催され、コロナ禍のオンライン開催を経て2023年から現地開催が再開され、2025年には第20回を迎えることができるようになりました。日頃よりご支援頂いております皆様のおかげでこれまで延べ1000名近くの教員と学生が時を共にする貴重な機会を繋いでくることが叶い、この場をお借りして深く感謝申し上げます。今回の大同窓会でKAAのこれまでの20年間の歴史を振り返り、現在の学生委員にその伝統と「KAAマインド」を引き継げたことによってこれからもKAAが「人生を変える1泊2日」となる伝説の企画であり続けてゆくことを予感することができました。

### ■三四会長　武田　純三（52回）

慶應赤倉アカデミーは、今年で20回目を迎えます。おめでとうございます。三四会赤倉山荘運営委員会からの発案で、第1回は2006年9月に医学部学生25名、大学院生5名、スタッフ合せて総勢41名が参加して行われました。KAAの特長は、教員・OBと医学部学生の縦の繋がりから、看護医療学部、薬学部へと横への繋がりに広がったこと、もう一つは運動部や文芸部とは性質を異にする活動が学生活動として継続されていることかと思います。さらに、毎回多くの参加希望者がいることは、この活動が学年間でしっかりとした連携が取られている事を意味していると思います。学生の時から培った連携は、将来の慶應医学の財産となっていくものと思います。継続は大きな力です。

### ■常任理事　北川　雄光（65回）

第3回、2008年のKAAを担当させていただきました。末松先生、岡野先生の第二回に続くご指名で大変緊張したのを記憶しています。「命と向き合う」という当時でも、学生さんたちには若干引かれてしまうようなテーマで、ひたすら外科医療の醍醐味を伝えました。腹腔鏡手術のトレーニング器材を赤倉山荘に持ち込んで、夜中まで学生さんたちと語り合いながら翌日のドッジボールも頑張りました。当時47歳の若手教授だった頃を懐かしく思い出しております。学生幹事の庄司佳晃君はじめ多くの参加者が外科に入ってくれて今も一緒に命と向き合っています。今回の同窓会であの頃の情熱をまた呼び覚ますことができました。ありがとうございました。

### ■常任理事　山内　慶太（70回）

私はKAAに昨年はじめて参加する機会を得ました。様々な学年の学生、教員、OBが愉しく夜遅くまで懇談を続ける姿を見て、医学部新聞の編集会議でのことを思い起していました。

私は、医学部在学中に寄生虫学の竹内勤先生に誘い込まれて1990年代後半まで、医学部新聞の編集会議に参加していました。竹内先生に、解剖学の安田健次郎先生、整形外科の矢部裕先生、井口傑先生、国立東京第二病院の石山先生がメンバーです。丁度、赤倉山荘の再建計画から募金活動、竣工の前後でしたので、先生方がかつての山荘について、明け方までの団欒の中で後の人生の宝を得たこと、その環境がこれから学生にも大切なことを熱心にお話しになっていました。

KAAにかつての赤倉山荘の伝統が引き継がれていることを実感した私は、前史と共にKAAの20年を祝いたいと思います。

### ■三四会　第６回定例理事会報告

- 産業医研修会を２月７日に開催。96名の参加があり、内60名が三四会員。女性の労働力、月経による体調不良に伴う体調不良、女性の健康向上のための新しい手法フェムテックの紹介などが報告。
- 慶應赤倉アカデミー（KAA）20周年記念同窓会を２月19日に開催。医学部、看護医療学部、薬学部から、かつての講師、参加者ら約50名が出席。第１回のキャッチフレーズである「君の人生を変える１泊２日」が、心によみがえった。
- 慶應連合三田会報告。３月の時点で891の団体の登録があり、「新規三田会の登録にあたってのルール」が制定。
- 支部のあり方について。会員数減少に伴う地方支部会の維持や、海外在住の会員組織について検討。
- オブザーバーとして、87回：小林裕章君、中島大輔君、97回：緒方俊之君、平野翔大君の４名が参加。
- 長年三四会秘書としてお勤めいただいた田中美和子君が今月で退職となるため、お礼と花束贈呈を行った。長い間お世話になりました。

### ■医学部長　金井　隆典（67回）

慶應赤倉アカデミー（KAA）創立20周年、誠におめでとうございます。KAAはこれまでのユニークな活動を通じて実に多くの人材を育成してきました。なぜなら、KAAを中心的に支えてこられた先輩たちの想いが熱いからこそ、それに感化された医療系学部の学生もまた熱い人材となって育っていると確信しています。慶應の学生は不思議と正規のカリキュラム以外の課外活動で、一つも二つも皮がむけて大きく成長します。その代表がKAAです。この教育効果は絶大で、今や正規のカリキュラムにも波及しています。やはり慶應の学生は半教半育と独立自尊が一番合っていると思います。医学部も全力で応援していきます。これからのKAAの益々のご発展をお祈りしています。

### ■医学教育統轄センター　門川　俊明（70回）

2025年2月19日に、KAA設立から20年収を記念した同窓会が開催されました。そこには、20年間の間に講師として参加した教員や学生委員として参加したOBやOGなど、本当にたくさんの方が集まりました。KAAの活動は2021年からは慶應義塾の公認の学生団体としての活動となり、私は学生団体の会長として学生を支援しています。KAAは医学部だけの活動から、医学部、薬学部、看護医療学部という三学部の活動として発展してきました。次の10年、さらに活動が発展するように、サポートしていきたいと思います。

### ■学生委員代表　堺　優真、大野杏花里

KAA20周年記念大同窓会にご参加いただいた皆様に、改めて御礼申し上げます。KAAは、医学的知識を深める場であり、各分野を牽引する先生方と語り合い、医療従事者としての姿勢を学ぶ貴重な機会です。本会を通じ、KAAが多くの著名な先生方やOBOGの皆様の心に残るイベントであり、多くの方々に支えられていることを改めて実感しました。今年も9月20日・21日に末松先生、岡野先生をはじめ豪華な先生方をお迎えし、貴重なお話を伺える機会を設けております。ぜひご参加ください。

## 鑑偏知来

いよいよ40歳。思えばあまりにもあっという間であった。不思議なことに20代よりも30代はさらに早く感じた。

私は2010年に医学部を卒業し、脳神経外科医として主に良性・悪性脳腫瘍患者に対して臨床・基礎の両側面から向かってきた。臨床では、良性脳腫瘍に対する頭蓋底手術や悪性脳腫瘍に対する覚醒下手術、及び遺伝子解析に取り組んでいる。基礎研究では、将来の臨床応用を見据えた日本発・世界初の研究を目指してきた。「ゲノム編集技術とiPS細胞を組み合わせた悪性脳腫瘍に対する遺伝子幹細胞治療の開発」を大学院で開始し、数年先の臨床応用を見据えている。また、「神経線維腫症2型（NF2）に対する免疫療法」の実用化に向かい準備を進めている。

臨床と基礎は、私にとって目的は同じで患者の予後を改善することであり、特に基礎研究のテーマは患者との出会いに大きく基づいている。いつか、難治性疾患の患者の明るい笑顔を取り戻す日を夢見て、これからも毎日臨床・研究を続けていきたい。そして、母校である慶應、さらに一緒に切磋琢磨している後輩達と日本の医療に大きく貢献したいと思っている。

今回この艦往知来を書くにあたり医者人生を振り返ると、勤務した病院すべてで上司に恵まれたと思っている。どの上司も私の背中をそっと押してくださり、本当に感謝している。医者14年目となり、今度は私が後輩にそういった経験をさせてあげたい。それがお世話になった上司への恩返しの一つでもあると思っている。医者として特別な心得があるわけではない。日々の診療で考えることは一つであり、「自分の大切な人が患者だったら医療従事者にどうしてほしいか」、それを実践することである。医者になった日から今まで変わらずそう思ってきた。退院した患者の元気な姿を見ることが何より幸せな時間であることもずっと変わらない。次の14年後も、そう思っていたい。

（脳神経外科　田村亮太　89回）